
浮遊する泡

芸熊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浮遊する泡

【Nコード】

N1197I

【作者名】

芸熊

【あらすじ】

高校時代、学校が楽しくなかったと思う方は少ないかもしれませんが。この物語の主人公達は、その少ない方、高校時代を楽しめない、でもその日常から脱却したいと思っている3人です。よろしければ見てやってください。

華絵 1

顔を向けた先には桜が有った。

花もとうに散って青々とした葉を実らせた桜。

花を咲かせていない桜は私には何の木なのかは分からない。

「…どうしたの？」

「何でもない」

春の陽気が過ぎ去り、もうすぐ夏を迎える季節。

私はこの季節が好きだ。

じめじめ、どろどろ。

皆は色んな言葉でこの季節を嫌う。

私には、この雨がこの世の全てを洗い流してくれる美しい物に見える。

「華？どうしたの？今日ずっとぼーっとしてるじゃない」

「そう？そうでもないわよ」

彼女は私の数少ない…いや、正確には一人しか居ない友人の天野悠美。^{アマノ ユミ}

このクラスを中心、つまりは優等生で可愛い。

まさか漫画の世界でも有るまいし、こんな子がこの世に存在してるとは思わなかった。

「なに？好きな人でも想ってた？」

「またそうやって茶化す。私には好きな人はいないわよ」

「またまたー。華も華の女子高生なんだから恋しなくちゃ！」

華…ねえ…。

私の名前は結城華絵。

初めて会った人には必ず「ハナエ」と読まれる。

華絵で「カエ」と読む。

そう説明するのも面倒だし飽きたものだ。

この唯一の友人は私を「ハナ」と呼ぶ。

ああ：もう。私はカエだ：。

そう頭の中で思いながらまた外を眺める。

何の木か分からない物が佇んでいる。

祐希 1

「けっ…女なんて…」

一人で呟いてみた。

何もない教室には音を吸収する物がなく凄く響く。

その音に自分でびっくりするほど響いていた。

「おーい、祐希ー」

「あ？なんだよ？」

「何敗目？」

にやけながら話してくるこいつは幼なじみ（と言うよりここまで来れば腐れ縁と呼べるかもしれない）の内海陽也^{ウツミアキヤ}。

「てめえ…見てたな？」

「ほら、幼なじみとしては親友の恋愛は心配じゃない？」

「失敗する方の意味で？」

「ご明察♪」

「ほう…そんなに殴られたいんだな？」

「きゃー！殴られちゃう！」

こいつの底抜けの明るさには正直助かる。

落ち込んでる時にはふざけてでも励ましてくれる良い奴だから。

「で？結局何敗目なのさ？」

「いつからトータルして？」

「高校だけで」

「この2年間で…3かな？」

「お前尽くすだけ尽くして告白したらフラれちゃうもんねー」

「うるせえ…。お前は彼女とどうなのよ？」

「いたって順調♪」

「何カ月？」

「カ月？ バカかお前は。3年目だ」

「ほう。そんな長かったか」

陽也には中3から付き合ってる彼女がいる。

それに対して俺は彼女居ない歴2年…

高校入る前に前の彼女にはフラれた。

彼女曰く俺は「何か色々厳しい」らしい。

成績中の中、陽也曰くそこそこイケメンで優しい、スポーツもそこそこ出来る、これ以上高校生に何を望むのか…

「ほら、落ち込んでないでさっさと帰るぞ」

「おう…」

「落ち込みすぎだって…」

「けっ…女なんて…」

また、そう一言呟いた。

文哉1

「もう卒業か。意外とつまらなかったな…」

高3の初夏。

推薦もほぼ決まり万が一が無い限り落ちることもないだろうと暇になった僕は何かを始めたかった。

漠然とした「何か」だ。

僕は友達も少なく周りからは「ガリ勉」と煙たがられている。

小さい頃からの「僕」と言う癖も治らないまま高校の3年間を終えようとしているとこだ。

「何か面白い事ないかなあ…。皆、受験勉強とか進路の事でてんてこ舞いだしなあ…」

僕は決して社交性がないわけじゃない。

何かを聞かれれば答えるし、遊びに行ったりもする。

でも軽いイジメの対象になっている気もする。

まあ気にしてないけど。

「なあ及川。お前推薦ほぼ決まったんだろ？勉強教えてくれよ」
来た。

僕にとっては烏合の衆の一人。

クラスの「誰か」だ。

「今まで勉強してなかったのが悪いんだろ？少しは自分で頑張ってみようとしなよ。まあ…教えるけどさ」

「サンキュー、及川！」

「あ、でも条件つけていい？」

「何？」

「ぼ…俺に何か面白い事を提供してよ」

「面白い事お？ゲーセン行けば良いじゃん」

「そんな普通の事じゃなくて学校で出来る面白い事！」

「はあ？んな急に言われても…」

「じゃあ考えておいてよ」

「あー…うん。分かった」

「あとね？」

「まだ何かあるのかよ？」

「ごめんね？俺、この通り「ガリ勉」だったからさ、君の名前覚えてないんだ」

ちよつとした今までの反撃してみた…さて、どうくるかな？

「おう、俺は辰巳雄司だ！」

あれ？

何か思ってたのと違う反応だ。

「辰巳君だ…」

「雄司で良いぞ」

「…分かった」

…この人苦手だ。

でも面白い事提供してくれる人だから…。

雄司、覚えた。

祐希2

「祐希さあ…何でフラれるか分かる？」

こいつは何を突然言い出すんだ。

「分かるわけ無いだろ…フラれる理由なんて全部違うし…」

「だよねえ…」

梅雨も明け、もう夏に入りかかっている日曜日。

俺は陽也と部屋でゴロゴロしていた。

正直、先月フラれた事を引きずって外に出る気は起きなかったからだ。

「もしかして…お前彼女にフラれた？」

「んな訳ないじゃーん♪俺と遥香の間に隠し事も壁もないの♪」
出たよ…ノロケ…。

「ついでに処女ま…」

すかさず何か重いものが俺の脇腹に直撃した。

「そんなに国語辞典投げられたいんだ？」

「投げてから言うな…つか壁とか無いなら何で日曜に俺の部屋に居るわけ？」

「遥香んち昨日から旅行…」

「ああ、そうか。その中野は元気なのか？」

「元気じゃなかったら旅行行ってないでしょー。風邪とかひいてたら半日は看病で遥香に付きっきりだよ。遥香病弱だしね」

病…弱…？

陽也の彼女、ナカノ ハルカ中野遥香はとても病弱と言えるような人間ではない。

中学の時、修学旅行で集団食中毒があった。

何故かうちのクラスだけ。

原因は先生が昼食の弁当を直射日光に当てたまま放置したからだ。
クラスもれなく全員食中毒にかかっている時、同じクラスの中野はぴ

んぴんしていた。

全員検査され、食中毒だと判明したが中野だけ「体の中で菌が死滅したみたいですね」と言われたそう。

「あれが病弱なら世の人間は全員難病にかかってるな」

「祐希は中学の時しか知らないからでしょー。何か遥香、高校でストレス溜まって病弱になっちゃったみたい。そして、それを支えるのが俺の仕事なの♪」

「あ、そ…」

ノロケ、ダメ、ゼツタイ（うざいから）

「ところでさ、何でさっきフラれる理由聞いたんだ？」

「あー…聞きたい？」

「聞きたい」

「じゃあ教えてあげよう！」

何か偉ぶっててムカつく…でも、ここは我慢だ…。

「祐希はね、絶対的な魅力が無いんだよ」

「はあ？」

「祐希さ、今まで何かに本気で打ち込んだことある？」

「そりゃあ水泳、サッカー、書道…」

「そんなにあるのがおかしいんだよ」

「はあ？何が言いたい？」

「俺は昔からずっとサッカーやってるけどさ、祐希って続かないじゃん。それは全部本気でやったことないからだと思うんだよ。だから…」

「うるせえ！！」

あ…ヤバイ…。

「…話聞く気がないなら俺もう帰るわ。せっかく遥香とのデートも断ってきたのに…」

「お前さっき中野は旅行って…」

「先月の事でまだ落ち込んでると思って心配だったから友達優先したんじゃない！なのにいるさいんだね」

「あ…ごめ…」

「帰る。じゃ…」

やっちまった…。

痛いところ突かれて動揺してた…。

陽也が帰ってから俺は動揺を隠せなかった…。

兄貴が夕食だからと呼びに来たのにも関わらず気付かない振りをして無視した。

「本気で…やってない…か。何だかなあ…」

独り言を呟いてもその言葉は宙に消えていくばかり…。

「ああ…腹が減った…」

華絵2

「は、はな！華！ど、どどうしよう？」

何だその某蜂蜜大好き人形熊みたいな狼狽え方は。

「どうしたのよ？」

「わたし、私ね…こ、告白されちゃった…」

ああ…何て可愛い生き物なんでしょう…。

もうすぐ夏休みだから男の子達はこの可愛い生き物と過ごしたくて必死なのね…。

私でもうっかり告白してしまいそうな目の前の生き物は自分の容姿を理解してないようだ。

「誰に告白されたの？」

「名前も知らない一年生の子…」

「何て言われたの？」

「う…あ…何かね入学式の時に私を見て一目惚れしたみたい…」

「はあ？悠美入学式出てたっけ？」

「ほら、あの…部活の…」

「それは入学式じゃなくて部活動説明会でしょ…」

「そう、それ！私、茶道部の説明で出てたからさ…」

「そう言えば出てたわね…。で、その少年は何で茶道部入らなかったのかしらね？」

「分からない…。けど、どうしよう」

「どうしようも何も…悠美はその少年の事好きなの？」

「分からないいい…」

何故泣く…。

ああ…この可愛い生き物どうしてくれよう…。

「まあ初めて認識して付き合ってくださいじゃ分からなくて当然よね。悠美はどうしたいの？」

「どうしていいか分からないから華に聞いているの…華は告白されたことないの？」

傲慢じゃないが告白されたことはある…。

その都度「ああ、そう。私は誰とも付き合う気はないの」と断ってきた。

で、ついた渾名が「冷血小悪魔」だ。

お陰で言い寄ってくる男はおろか、変な逆恨みやイメージによって女の子さえも私を遠ざける。

「有る…けど私の話を参考にしちゃダメよ？」

「何で？」

「私の断り方は悠美には合わないから」

「そうなの？」

「じゃあ悠美は「ああ、そう。私は誰とも付き合う気はないの」って言える？」

「言えないいいい…。華ひどいいい…」

「分かった？私の話を参考にしちゃダメ」

「分かった…。けど何でそんな断り方するの？勇気を出して告白してくれたのに…」

「私はね、何にも興味を持てないの。もちろん恋愛にも」

「何で？」

「何かをやって、面白いって思った事が無いのよ」
ん？

あそこでうろうろしてるのは…？

「でも…華、ピアノやってるじゃない？ピアノは？」

「ピアノは好きよ。周りを気にしなくても鍵盤を叩けば音を返してくれるもの。でも面白いとは違う。ピアノを職業とはしたくないわ」

「でも…」

「そんな事より。告白されたのはどうするの？少年、待ってるんじゃない？」

「…とりあえず、分からないから友達になる。けど、なんて言えばいいの…?」

「そうね、ありきたりだけど「友達から始めましょう」で良いんじゃない?」

「うん、そうだね」

やっと笑った…。

「ところで、あそこにいる少年は?」

「あ!」

「悠美に告白した少年?」

「うん…私、どうしていいか分からなくて逃げてきちゃったから…」

「逃げてきたの?!じゃあ早く答えを言ってあげなきゃ可哀想ね。早く行ってらっしゃい」

「うん、行ってくるね!ありがとう、華!」

悠美を見送り私は帰る支度をしていた。

「あ、あの…結城さん!一緒に帰らない?」

「はあ?」

誰だお前…。

華絵3

「あ、あの…結城さん！一緒に帰らない？」

「はあ？」

誰だお前…。

「嫌…じゃなかったらで良いんだけど…」

「じゃあ嫌。さようなら」

「ちょ、ちよっと待って！」

「何よ？嫌じゃなかったらって言ったじゃない？」

「とりあえ…」

「嫌だから帰る！」

「とりあえず話を聞い…」

「私は誰とも付き合う気はないの！」

「…は？」

「…え？」

何だこの空気は…。

「はっはっはっはっは！え、何？告白だと思ったの？」

「悪かったわね、自意識過剰で！」

「いやいや、悪くは無いよ。でも…プフッ。駄目だ…耐えられん」

聞けば、こいつはいつも私が一人で居るのを見るに見かねて話しかけてきたらしい。

「で？あんた誰よ？」

「…え？」

またこの空気か…。

「だから、あんた誰？私あんたのこと知らないんだけど？」

「え…マジで？うわあ…それちよっとショックだ…」

「はあ？何でよ？」

「帰り道が同じ方向って事に違和感？」

「ない。たまたま同じ方向って事もありえるじゃない」

「あの…さ。俺、佐々木修ササキ シュウイチ一って言うんだけど…知らない？」
だからあんた誰？ってさっきから言ってるのに…

「知らないって言っ…」

「中学の時、同じクラスなんだけど…」

「え？」

「しかも君の家のお隣さん…」

「な…え？ちょっと待って、情報を整理する」

え？隣？

隣ってピアノの先生の家よね？

佐々木先生？

まさか…！

「あんた佐々木先生の息子？！」

「そうだよ」

「佐々木先生に息子居たの？！」

「いるから俺がここに居る」

「私、知らないわよ？！」

「あんたと同じ時間にレッスン受けてたから、他の家の子として認識してたんじゃない？」

「かも知れない…」

「それはそれで何か複雑…」

そのまま話を聞いていると彼は本当に佐々木先生の息子だった。

私しか知らないはずのレッスンの話や佐々木先生の家のピアノの位置などことごとく当てはまった。

「で？あんた私に用があって話しかけたんでしょ？」

「だから、さっき言ったじゃん。いつもひ…」

「あんたは用が無かったら話しかけないわ。何せ話す機会があっても一切話しかけてこなかったんだもの」

「…流石。洞察力は凄いね」

「大方、悠美の事でしよう？」

「正解」

「私はあるたと悠美が付き合うってなら許さないわよ」

「それは無い」

「じゃあ何よ？」

「今日、天野さんに告白してた子居るだろ？あいつ俺の弟」

「な…ええ?!」

「取り敢えず、その公園で話さない？」

こいつの弟は修二というらしい。

今日告白したのはその修二君。

私が修二君を知らなかったのはレッスン中に騒ぐから先生の友人の家に預けられていたからだそうだ。

修二君とこいつはとても仲が良くて色々相談にものっていたらしい。

「で、兄としては弟の恋愛が成就して欲しいわけよ」

「だから協力しろって？」

「そゆこと」

「はあ…嫌よ」

「何で？」

「恋愛なんて誰かに応援はされても援護はされるべきじゃない」

「確かにね。でも、あいつ天野さんの事かなり本気みたいでさ、最近悩みすぎて俺ともまともに話してくれない…」

「それはあんたが悠美と同じクラスだからじゃない？」

「でも仲良くは無い。…って、えっ？まさか修二俺に嫉妬してる？」

「じゃないの？」

「…お兄ちゃんショックだ」

話してみると意外と良い奴だった。

兄弟のいない私には理解できない領域の話ばかりだったけど。

話の流れで私は協力する事になったが、大したことはしない。

話のネタをあいつを通して修二君にパスするだけ。

…はあ。

ストーカーと間違われても知らんぞ。

「恋愛か…やっぱり興味持てないな」

文哉2

僕は今何をしてるんだ…？

今はやるべき事が有るだろ…？

何故…

何で高3の夏に遊んでんだあ？！

やらなきゃならないことが有るじゃないか！

勉強だよ勉強！

僕はいつらと何をしてる？！

「及川あ？遊ばないの？」

そうだ、ゲームセンターに来ている。

「遊ぶよー」

で下らない遊びに付き合ってる。

何で？

そうだ、こいつらの口車に乗せられて流れで…

って言うか僕…こいつらの名前知らねえ…

誰だよお前ら。

勉強しろよ…

後悔しても知らねえぞ。

物心ついた時からそうだった。

父親はある大学病院の医局長。

母親は弁護士。

年の差なんと、16歳。

母さんは確か23の時に俺を産んだから…39？！

39で医局長かよ？！

あり得ねえだろ…

ん？今は医局長だけど昔は違うのか？

ま、いいや。

で、母さんは学生の時、たちの悪いストーカー被害に遭って一度刺された事があるらしい。

それも結構重傷になるような。

その母さんを救った医者が親父ってわけだ。

そんな空想的な家庭で生まれ育った僕は、もちろん空想的な事をさせられた。

バイオリン、ピアノ、乗馬その他諸々。

初めはそれに従うことが正しいと思っていた。

小学校も中学校も私立のイイトコ出だ。

でも中学校で気付いた。

こんな退屈な毎日を過ごしていて何になる？

僕はもっと面白い事をしたい！

そう思って高校は親に反抗して公立高校に入った。

あん時の母さんの狼狽え様、可笑しかったな。

それからだ、親父が俺に笑いかけなくなったのは。

それが怖くて恐ろしくて、せめてもの罪滅ぼしで勉強をした。

昔からの癖でもあったけど一層、勉強に励んだ。

今でも頭じゃこう思ってる。

僕はもっと面白い事をしたい。

ゲームなんざ下らない。

両親のように人を“救う”仕事なんてやりたくない。

上流階級を絵に書いた様な家なんぞ嫌いだ。

僕：いや、俺はもっともっと面白い事をしたいんだ。

今している勉強は、この先に待ってる面白い事をするための手段に過ぎない。

50過ぎた親父なんて、もう怖くもなんともない。

俺は面白い事をするんだ！

「おーい及川あ？早く来いって」

「おう、今行くー」

だから、お前ら誰だよ？

…とか考えつつ流されちゃってるのよね。

祐希3

「はぁ…」

ここ数日、気が乗らなかった…

学校にも行きたくないほど。

理由は、まずフラれたこと。

そして、陽也と喧嘩したことだ。

どちらかと言うと後者が強い理由になる。

陽也は物凄く頑固でガキくさい。

陽也が原因で喧嘩したのにも関わらず1ヶ月間ほぼ無視とかはザラにある。

最近のマシになってきたから1週間くらいに短縮されてきたが…。

しかも今日は陽也のおばさんに弁当を預かってしまった…

陽也はサッカーの朝練で早く家を出たらしいんだが、弁当を忘れたみたいだ。

これを機に、というか…やっぱりちゃんと謝らなければ。

「陽也ー」

「……………」

こいつ…分かるように無視しやがった。

「なあ、陽也。とりあえずお前のおばさんから弁当預かったんだ。これ…」

「ん…」

「あとさ…こないだは本当にゴメン。多分、凶星だったんだ…。動揺して声荒げて怒っちゃった」

「それだけ？」

「え…？」

「それだけで俺怒るほど心狭くないんだけど？」

嘘つけっ！

「いや、実際まだ整理ついてないんだ…。だから、まず謝らなきゃ
と思って…」

「ふーん。…前の続き、聞きたい？」

「え？」

「あの話の続き聞きたい？」

「そりゃあ聞きたい…けど」

「けど？」

「話してくれるのか？」

「それを聞いて俺が何で怒ってるか分かるならね」

陽也君よお…そいつは無茶な話じゃないかい？

「善処はする」

「人はね何かに本気になってないと輝けないと思うんだよ。俺の場
合はサッカードさ」

「うん…」

キーンコンカー…

「あ、チャイム鳴った。また帰りに話す」

「分かった」

帰り道、陽也の話を聞いていた。

どんな話だったかと言うと…

まず俺は本気で打ち込んでいる物がない。

だから女の子も俺の評価基準に出来るものがない。

フラフラ色々やってる奴は恋愛でもフラフラする奴だと思われる。

だから何かをやり通してみろ。

って話だ。

ここから陽也が何で怒ってるかを見つけろ、と？

無茶な話だ…

「おい」

「あ？」

「飯だってよ」

夕飯後、兄貴に話してみよう…。

華絵 4

「かーえーちゃん♪」

昼休みになるとすぐに話しかけてくるウザい奴。

「……………」

「…?」

悠美が不思議そうな顔で私達を見比べている。

「あ、そか。お邪魔だね!」

満面の笑みで去ろうとする悠美。

何かを勘違いしたみたいだ。

「そうね、悠美。行きましょう」

「うおおい!! 何で? 何でそーゆー流れになるの?! おかしいでしょ? 俺がさそ…」

「それ以上喋るとネタば…」

「すみませんでした、かえ様。ごゆっくり昼食をお楽しみください」

「よろしい。行きましょ、悠美」

「え? え? 良いの? 佐々木君可哀想だよ」

「良いのよ。あれは可哀想と言う言葉などとは程遠い生き物だから」

「え、そうなの?」

食堂に着いた私達はいつもの場所に座って昼食を摂っていた。

理由は分からないけど上級生も同級生も下級生も私達の為に絶対に座らないようだ。

「ハナー。やっぱり佐々木君可哀想だよー。ハナの事珍しく「カエ」って呼ぶ人だし…」

食事を始めた直後に始まったか。

もう少し混乱して帰りくらいになる予定だったのに。

悠美の「これ」は「青春乙女的説教」だ。

私が勝手に名前をつけて勝手に名物にしてる。

「悠美」

「だからさー、やっぱりハナも恋とかしなき…」

「悠美？」

「ハナ聞いてたー？」

「悠美、それは私にとってどうでも良いことなの。それよりも悠美は何で私の正しい名前を言えるのに「ハナ」って呼ぶの？」

「それは、そっちの方が女の子らしくて可愛いし呼びやすいから」

ああ…この可愛い満面の笑みだけで戦争は無くせるんじゃないだろうか。

「あーまのさん♪昼食、同席して良いかな？」

「あ、佐々木くーん。どうぞ…あ、でもハナは…」

「…はあ。良いわよ」

「ありがとう♪」

その瞬間、修一の顔に不適な笑みが見えた。

こいつ…私の唯一の弱点を見つけやがった…。

「2人ともいつつもココで食べてるよねー。何でココなの？」

「夏は緑が綺麗だし、冬は陽射しが暖かいから気持ち良いんだよー。

佐々木君も次からココで一緒に食べる？」

「そうだねー。なら誘われちゃ…俺んち弁当だから毎日は無理だけど」

一瞬だが周囲に殺気が走ったのが分かった。

この席が毎日空いてる理由が少し分かった。

ここまであからさまな殺気に気付かない悠美も大したものだ。

「にしても何でこんな良い場所毎日誰も座らないんだろうねー」

悠美さん、それはあなたの為です。

そんな話をしてるうちに昼休みが終わった。

午後の授業中何か携帯が鳴った気がした。

サブディスプレイに映る文字を見てみたが気のせいだったようだ。

「かーえーちゃん♪」

「……………」

「…?」

悠美が不思議そうな顔で私達を見比べている。

「あ、そか。お邪魔だね!」

なんだこのデジャヴ。

「悠美、たまには一緒に帰ろう」

「今日部活だよー」

困った顔で笑ってる悠美も可愛い。

「あれ? 佐々木君は?」

周りを見渡すと教室の隅でいじけてる修一が居た。

「ほら、さっさと帰るよ」

「そんなあからさまに怪訝な顔しなくても良いじゃない?」

悠美に別れを告げ学校を出た。

「授業中のメール読んだ?」

「ああ…読まずに削除したわ」

「一応重要なメールだったんですけど…」

「冗談よ。まだ読んでないけど」

「冗談に聞こえないから…」

読んでみると修二君と悠美をくつつける為の作戦が書いてあった。

しかも悠美の取り巻きやファンの事も考慮された作戦が。

意外と頭は良いみたいだ。

「どーよ?」

得意気に言ってきたこいつが腹立つ。

「これだけ出来てるなら私の手助け要らないんじゃない?」

「いやいや、必要だよー。こことかさ」

「…ああ。これは私しか出来ないわね」

作戦を練りつつ歩いていたらすぐに家についた。

「じゃまた明日！」

「はいはい、バイバイ」

はあ…疲れた。

祐希4

「なあ、雄司」

…返事がない。

「おい、雄司！」

…本を読んでる兄貴はチラッとこっちを見たが返事はしない。

「あーもう。はいはい、お兄様、私の相談に乗ってください」

「ん、よろしい」

こいつは兄貴の雄司。

同じ学校に通ってる。

俺はいつも陽也と通ってるから、いつも一人で登校してるようだ。

うちの兄弟は仲が良い。

歳の離れた妹にベタベタな兄二人だ。

妹は今年中一になったばかり。

中学までは妹も含めて四人で登校してたが俺らに彼女が出来てから

気を効かせて妹と登校してた。

今はよく分からないけど多分一人で登校してる。

妹の結羽^{ユウ}も友達と登校してるみたいだし。

「で、何の相談だ？また陽也と喧嘩でもしたか？」

「うん…」

「何で？」

俺は細かく兄貴に説明した。

「んー…それは自分で考えた方が良いんじゃないかなあ？」

「考えて分からなかったから雄司に聞いている…」

「んー…じゃ、ヒントだけな」

「うん…」

兄貴のヒントをまとめるとこんな感じだ。

・陽也は彼女とのデートを断ってまで俺を心配してた

・心配してたのにも関わらず逆ギレされた
・兄貴の予想では俺の悪いところを言いたくなかった
言われてみれば思い当たる節があった…

「じゃあ…陽也は俺を友達として心配してて…ん？あれ？」

「落ち着いて考えろ」

兄貴は優しい笑みで諭すように俺に言った。

「ゆう兄ー！ゆき兄ー！早く風呂入っちゃえてさー！」

結羽が一階から叫んだ。

「分かったー！ほら、風呂でゆっくり考えてこい」

「うん…」

「後でお前なりの答えで良いから聞かせろよー」

「うん…」

一応、風呂でじっくり考えたが未だによく分からない。

「母さん、何かデザートある？」

「冷凍庫にアイス入ってるよー」

「分かったー」

アイスを食いながらボートとテレビを見てたら雄司が風呂から上がった。

「祐希ー。答え出たかー？」

「多分…？」

「よし、じゃあ俺の分のアイスを持って部屋に来い」

俺は結羽と兄貴の分のアイスを持って二階に上がった。

「結羽ー。アイス持ってきたぞ」

「…！ゆき兄。ありがとう。たださ…ノックしてよ！」

「あ、わりい。じゃ、おやすみ」

結羽に絡みたかったが今はそれどころじゃなく兄貴の部屋に向かった。

「天国のお父さん。結羽が反抗期です…」

「おい。親父を勝手に殺すな」

後ろで兄貴の声がした。

ちなみに親父はバリバリ健在だ。

建設業、しかも現場に居た人。

なのに資格取りまくって今ではちょっとした土建屋の社長してる。
力では未だに勝てる気がしない怪物だ。

「部屋にいたんじゃないの？」

「トイレ行ってた。さて、答えを聞かせてもらおうか？」

「多分さ…多分なんだけど…」

俺は俺なりの答えを兄貴に聞かせた。

「ま、上出来なんじゃない？」

「ホントにこんな事なのか？」

「こんな事って言い方は駄目だなあ。陽也にとっては…ってよりも普通は当たり前なんだぞ。お前はまだ分からなくて当然かもしれないけど…」

「って言ったって雄司と俺、一つしか離れてねえだろ」

「まあな。ま、俺は俺で色々有るんだよ」

「そんなもんなのか…？」

「そんなもんなの。あ、それよりさ。お前、何か面白いこと知らない？」

「面白いことお？ゲームで良…」

「くないんだわ。前に友達と取引してさ。そいつ頭良いから受験勉強教えて貰おうと思って聞いたら「代わりに学校で出来る面白いこと提供しろ」って。プレゼン期限明日なんだよ」

友達なのに取引で。

プレゼンで。

心の中でツツコんだ。

「学校…面白いこと…学祭とか面白くない？」

「学祭はもう委員会出来てるから今からじゃ無理だろ」

「じゃあ…夏祭り？」

「今が夏だ」

「冬の花火大会とかは？キャンプファイアとかやってさ」

「ほうほう。あ、ちょっと待て。メモ取る！」

「どうせならクリスマスパーティーにして、その日に花火すんの！
んでキャンプファイア囲んでワイワイと！」

「それ良いな！それで行こう！明日プレゼンしてくるわ！」

兄貴と話してたら暗い気持ちさが吹っ飛んだ。

兄貴の笑顔はやっぱり凄い。

修一

あれ？

俺は何でこんなことしてんだ？

その思った瞬間、唇に激痛が走った。

「何してんのよ…私達まだ恋人でも何でもないのよ？なのいきなりキスなんて…」

それより唇噛むってどーよ？

「佳奈ちゃんて意外と古風なんだね♪」

パシッ！

「真面目じゃないならキスとか止めて…」

ヤベツ…やっちまったか…。

「真面目だよ。俺、佳奈ちゃんと付き合いたいもん」

パシッ！

痛え…

「じゃあなんで私を見てくれないの？」

「いっつも見てる…」

「嘘つき！…もう話しかけてこないで！」

そう言って佳奈ちゃんは去っていった。

「アツレェー？おかしいなあ」

俺にはフラれた理由が全く分からない。

「何でフラれたんだあ？」

一人でブツブツ喋りながら帰り道を歩いていると後ろから声がした。

「兄ちゃん！聞いてくれよ！」

「おう、どうした修二？」

「兄ちゃん唇腫れてるよ？」

「まあ…ちよつとぶつけた」

さすがに弟にはカッコ悪い兄ちゃんを見せたくない。

「それよりどした？なんか良いこと有ったのか？」

「有った！俺、次の試合からレギュラーだって！」

「マジか！それは良かったな！」

こいつは弟の修二。

小学校から野球をやっている。

本当はピッチャーになりたかったらしいがリトルリーグの監督にショートにされた。

その日帰ってきてから「お、俺ショートで守りのスペシャリストになるんだ！」って泣きながら言ってたなあ…。

にしてもうちの母親がよく野球なんて許したもんだ。

うちの母親はピアノのレッスンを自宅でやっている。

俺が昔、友達とサッカーやっててキーパーをしてたら突き指をした。その日は飯抜きだった。

「あんたはピアノ弾くのが一番大事な指を怪我して帰ってきたからご飯抜き！」って。

烈火の如く怒ってたのに…

「修二。兄ちゃんちよつと用事あるから先に帰ってて」

「用事って何だよー！」

「進路調査票ガッコに忘れたから取りに行ってくる。明日提出だから！」

「分かったー！」

実際何も忘れてなかった。

俺は公園でボーッとしてたかっただけだ。

「はあ…佳奈ちゃんにフラれたし進路どうしよ。同じ学校行こうって言ってたのに…」

公園には夕方だと言うのに小学生くらいの子供がまだ遊んでいた。

「おいおい。もう6時になるぞ。物騒なんだから早く帰れよ…」

その願いが効いたのか間もなく小学生達は帰っていった。

俺は一人で王様のようにジャングルジムのとっぺんで座っていた。

「私を見てないってどーゆー意味だよ…」

ジャリッ

「!…あ」

そこには一人で佇む同じ歳くらいの少女がいた。

彼女は俺に気づいてない。

夕暮れの陽に照らされた彼女はとても綺麗で俺は思わず声を出してしまった。

「キレイ…」

「!」

彼女は俺を睨んだ後、踵を返して居なくなった。

「今の…同じクラスの…」

文哉3

「及川ー！」

また烏合の衆か…。

ちよっと無視してやる。

「なあ及川ー！」

俺は流されないって決めたんだ！

「文哉！」

「！…なんだ、雄司か」

烏合の衆だと思ってた奴は雄司だった。

ちよっとバツが悪い…

「どうしたの？」

「どうしたの？って…『面白いこと』の期限って今日だろ？」

「ああ…そうだったね」

どうせ雄司には期待してない。

「聞いてくれよ！うちの弟が考えたんだけどさ…」

出た、兄弟自慢。

兄弟の居ない僕には嫌味にしか聞こえない。

「ってことなんだけど、面白そうじゃないか？」

「どこが？具体的且つ分かりやすく説明してよ」

「だからさあ…」

所詮、頭の悪い人が考えることなんか面白くないに決まってる。

「…で、イベントをやる辺りが面白そうじゃないか！」

「全然。全く面白そうじゃない」

「何でだ？」

暑苦しい。

正直、雄司の笑顔は苦手だ。

「僕はイベントなんてやりたくないんだよ！本当なら学校祭にも出たくないし、そんな…」

ガンッ！

「文哉…」

「な、何だよ…急に机叩くなよ」

「お前、感謝したこと有るか？」

「感謝って何で…」

「毎日食にありつける、服も住む場所もある。人にありがとうって言ったこと有るか？」

「そんなのいちいち覚えてな…」

「覚えてる範囲で良い。最近で良い。言ったか？」

言った覚えはないな…

「言っていない…」

「何でだ？」

「そんなの…感謝する事をされた覚えも無いし…」

「お前…寂しい奴なんだな」

そう言い残して雄司は去った。

「何で怒ってるんだよ…」

その日は雄司が去り際に見せた妙な表情が頭に焼き付いて離れなかった。

「どうすれば良いんだよ…あー！もう！分かんない！数学の方が余程簡単だよ！」

数学とか科学の方が余程簡単だ。

答えが有る分、忠実に正しい道を辿っていけば、それがライトスタッフになる。

コンコンッ

「文哉。ちょっと良いか」

「何だよ」

「お前、進路はどうするんだ？」

「○○大学でほぼ推薦も決まってるよ…」

「学部は？」

「医学部…」

ではなく本当は理工学部。

「医学部か…そうか。俺と同じ道は辿って欲しくなかったな…。邪魔したな」

「え…？」

何だ？

何が言いたかったんだ？

最後に思わせ振りのセリフ吐くなよ！

あー！もう！

何でややこしい問題抱えてる時にややこしい問題が次から次へと入ってくるんだよ！

「あー！ー！ー！」

僕は家の中だということを忘れて力一杯吠えてしまった。
コンコンッ

「文哉？何かあったの？」

「ヤバ…何でもない！」

修一 2

「ねえ。聞ってるの?」

…居ないなあ。

「ちよっと!聞ってるの?!」

やっぱり学校じゃ気配消してるのかな…

「修ちゃん?」

あ、居た居た。

あの席なのか。

パシッ

「いって…」

「やっぱり修ちゃん私の事見てないじゃない!」

「あ…ごめんごめん♪ちよっとボーッとしちゃってさ。で、なんだっけ?」

「バカッ!」

「ちよっ…佳奈ちゃん!待ってよー!」

翌日、朝一で奇跡的に佳奈ちゃんと仲直りした俺は佳奈ちゃんから告白された。

当然、断る義理もなく喜んでお受けしたわけだが…

秋の天気と女の心はなんとやら…

それに告白を受けた瞬間から「修ちゃん」だとさ…

急に馴れ馴れしくなった…

ま、良いけど♪

「待ってって!佳奈ちゃん何で怒ってるのさ!?!」

「私の事見てないから…」

「さっきはボーッとしちゃっただけだって」

「……ホント?」

「ホントだって♪」

「…き」

「ん？」

「ウソつき！」

「何でさ!？」

「ずっと結城さんの事見てた!家隣で幼馴染みて事も分かるよ。でもいっつも結城さんの事見てる!」

「え?! そうなの?!」

結城と家が隣?

結城と俺が幼馴染み?

「へ…? 何で修ちゃんが…?」

「いや、俺…え? 結城と家が隣で幼馴染み?!」

「じゃないの…?」

「いや、まず幼馴染みはあり得ない…だって俺結城の事知ったの今年だもん」

「でも結城さん修ちゃんちのピアノに通ってるって…」

「結城が言ってたの?」

「いや、何か結城さんの近所に住んでる先輩から聞いて…」

「初耳だぞ、それ…」

「じゃ、じゃあ何で結城さんばかり見てるのよ…?」

「いや、見てな…」

「見てるよ。3年になって同じクラスになってからずっと…」

「そんなはずな…」

「だから修ちゃんは私じゃなくて結城さんが好きなんだと思った…」

「いや、佳…」

「もういいよ…」

うそーん…。

めでたく付き合ってた期間、最短記録更新。

…めでたくねえよ。

更新も何も佳奈ちゃんが初めて付き合った子なんだけども…

俺は帰りがけに公園に寄った。

「二日連続か…」

懸案は佳奈ちゃんとどうするか、結城の家が本当に隣なのか、結城を目で追ってるのは本当なのか。

とりあえず佳奈ちゃん。

…とは、もう無理だろうなあ。

本気で泣いてた上に本気で怒ってたし。

でも気まずいのはやだなあ…。

取り敢えず明日謝ろう…。

謝ってヨリを戻せるなら戻したいし…。

結城について…は母さんに聞いた方が分かるか…。
にしても俺、結城見てた覚えはないんだけどなあ…。

無意識？

そんなワケない…。

見てたとしたら何で…？

………何で？

………何で？

…何で？

「あー！もう分からん！帰る！」

ジャングルジムの周りで遊んでいた子供がビクツとしたが気にしない。

「ただ…いまー」

レッスン部屋からピアノの音が聴こえてきたので俺は静かに家に入
った。

今日は誰のレッスン日だ…？

あれ？

俺、今日か？

ヤッベエ！！

急いで着替えて行かないと…！
着替えたスピード、記録更新。

一日に2つも記録更新するなよ、俺…

カチャ…

「先生遅れてすいませんでした」

「…何で遅れたのかしら？」

「捨てられてた猫を見つけたのでミルクをあげてました…」

我ながら苦しい言い訳…

「そう。次から気を付けてくださいね。他の生徒も居るので。さて、レッスンは始めるわよ」

うわぁ…絶対嘘だってバレてる…

「返事は？」

「はい…」

うちではレッスンの時はいくら親でも「先生」と呼ばなければなら
ない。

理由は「他の生徒と平等に扱うため」だそうだ。
ん？

他の生徒？

今まで気にしてなかったけど…どんな子なん…

「結城い?!」

明らかに分かりやすく大声を出してしまったにも関わらず結城はピ
アノを弾き続けている。

ガッツ！

「レッスン中は静かにしましょうね」

「はい…」

先生…いや、お母様、さすがに練習曲集の角は痛いです…

その後、結城は何事も無くうちの親に「ありがとうございました」
と言って帰っていった。

「修一？あんた結城さん知ってたの？」

「同じクラスだし…」

「手が止まってる。あら、そうなの。知らなかったわ」

「結城の家って…」

「隣」

「そうなの?!」

ガッ

「だから手は動かせ。叩くよ?」

もう叩いてるくせに…

「あんた結城さんの事好きなの?」

「別にそう言…」

ガッ

「何回言わせる気?」

「すいません…。でも今は母さんが…」

「何か言いましたか? 佐々木君?」

「何でも有りません…」

「よろしい。では曲集38ページの…」

「疲れたあー…」

俺は風呂からあがり部屋で転がっていた。

やはり結城はお隣さんだった。

しかもレッスン日が俺と一緒に。

俺のレッスンは人の入れ換えが有った覚えはない。

俺が幼稚園時代から変わってないはずだ。

母さんもそう言ってたし。

たしか小1の時に俺の他に人が来たのは覚えてる。

…ん?

って事は…?

「俺、小1からずっと結城とレッスン受けてたのか?!」

マジかよ…。

気付かなかった…。

雄司 1

「おう、またなー！」

さて、帰るか。

たまには結羽でも迎：

パスッ

「なんだこれ？」

『辰巳先輩へ

△月□日の放課後、グラウンド横クラブ頭の裏で待ってます』

「んー：主旨は分かるし何をされるかも分かるけど：【頭】じゃないなあ：」

名前も書いてないし、何年生か分からないし：

どんな子かも調査も出来ない：

どーしましょ：

ふう：サッパリした。

「祐希ー！風呂空いたぞー！」

「わかったー！」

さて、宿題に取りかかりま：

パスッ

「なん：ああ、忘れてた：」

んー：『先輩へ』って事は年下なんだろうけど：

どれくらい下なんだ：？

1年生だったら気まずいなあ：

2年生ならまだ：

中学生なわけではないだろうし：

「俺にどうしろって言うんだ：」

ガチャッ！

「雄司ー！アイ：」

「ふおおい!!何?!ノックしろよ!!どした?」

「何そんなビックリしてんの?いつもノックしてねえじゃん?」

「いつもがおかしいの!これからはノックしなさい!で?何?」

「アイス有るってさ」

「ん、今行くわ」

さあ…宿題だ。

「えっと…で…だから…あれ?…ああ、こうか」

……………

「よしっ!終わったあ。水飲んで寝るかあ」

ドサッ

ガサッ

あ…

また忘れてた…

祐希のせいだ…

でも…

眠…

かん…が…な…ら…

スー…スー…

「んーっ!ふう。いやぁ良い天気だ!」

飯食って学校行くか…

…の、前に祐希と結羽起こしてやらんと…

カサッ…

ん?

……………

「あーっ!忘れてた!」ダダダダ…ガチャ…ガチャッ!

「雄司うるせえ!!」

「ん?おう祐希。起きてたのか」

「起きてたか、じゃないよ。何時だと思ってんのさ雄にい」

「おう。結羽も起きて…」

「取り敢えず時間見ても」

「ん？……………ヤッベエ！」

何とか遅刻しないで学校着いたけど…

今日呼び出されてる日なのに…

何も…考えられなかった…

って言うか…疲れた…

華絵5

何だか今日はダルいわ…

「ハナー！」

寝ちゃおうかしら…

「ねえ！ハナー！？」

ダメ…眠い…

「ハナ、起きて！」

「何よ悠美…眠いの。寝かせて」

「…良いけど次、移動だよ？」

「…じゃあ保健室行くわ」

「わかったー。じゃあ先生に言っておくね」

女の子週間なんて嫌いだ…

コンコン

「どうぞー」

「失礼します…」

「どうしたの？」

「寝かせて下さい…」

「随分堂々としたサボりねえ」

「違います…女の子特有のアレです…」

「あら、重いよね。奥のベッド空いてるから使いなさい」

「ありがとうございます」

「あ、寝る前に熱測ってね」

「はい…」

熱は普段より低かった。

女の子週間が終わったら元に戻るはずと先生は言っていた。

私はベッドに入るなり寝てしまった。

前日に夜遅くまで本を読んでいたせいも有るだろうが眠りに入るの

は容易かった。

が…

ブーン…ブーン…

『発信元…修一』

プレビューウィンドウに奴の名が表示されている。

眠りを妨げられた事と具合の悪さにイラつきながらメールを開くと

『カエちゃん大丈夫？どしたの？具合悪いの？』

「チッ…」

つい舌打ちをしてしまった。

『具合が悪いから保健室に居る。馬鹿かあんたは。もう二度とメールしてくるな』

そう返し再び眠りについた。

「…うきさん？結城さん？」

「ん…何ですか？」

「大丈夫？凄くうなされてたみたいだけど…？」

「いや…何か…夢見が悪くて…」

「そう…あんまり無理しちゃダメよ？」

「はい…」

「あと、私ちよっと出るから何かあったら職員室に行ってね。鍵は閉めていくから心配しないで。そんな時間かからないで戻ってくるから」

「分かりました…」

私は昔の夢を見ていた。

小学生時代のとても嫌な思い出。

思い出と言うより…ただの…トラウマ…

私の父親は変質者だった。

今は既に母と父は別れ、司法命令によって父は私達に近づいてはならないようになっていく。

父は私が小学4年生の時に私に性的虐待を始めた：

初めは母に見つからないようにコソコソと私の体を撫でたり舐めたりしていたが、回を重ねる度にSMまがいの事をされるようになっていった。

それはおよそ1年間だったが私には1年が10年にも感じた。

今思えば1年間も続いたのにも関わらず貞操を守れたのは奇跡的だろう。

私は、それ以来「大人の男」に拒否反応が出るようになった。

今ではかなり良くなったものの当時は男の先生が近づくだけで過呼吸になり倒れたりしていた。

そのせいで私はクラスの輪からどんどん外れていった。

クラスの担任も女の先生に変えられ男の先生にも迷惑をかけた：中学校からは周りの男子も成長した事により慣れてきたのか倒れるまでは無くなったが何かしらの拒否反応は出た。

「最悪：何でこんな事：」

ガチャッ：ガララッ

「結城さーん？大丈夫？」

「先生：帰っても良いですか？」

「そんなに具合悪いの？」

「いえ、そういうわけじゃないですけど：ちょっと：」

「んー：本当は許可したくないけど、まあ良いわ。顔色もちよっと悪いみたいだし」

「すいません：」

「鞆は？」

「あ：友達にお願いします」

その後、悠美にメールして鞆を届けて貰った。

悠美は凄く心配してくれたみたいだった。

帰り道、私はずっと

「あのクソヤロウのせいで：」

と眩きながら泣いていた：

文哉4

はあ…全く何も分からない。

何で？

何が？

「『この時の主人公の心情を答えなさい』とか…無理だろ」

そう、今は現国のテスト中だ。

数学とか科学は強いんだけど…国語はダメなんだよなあ…

それによく分からない案件が2つも有る…

1、雄司が何故か怒った

2、お父さんの意味深な発言

テストに集中したいけど、これのせいで集中出来ない…

どうしても頭の中でぐるぐる回ってる。

あれ以来、雄司は勉強教えてって来ないし。

学校で目があったと思ったらバツの悪そうな顔して目を逸らす。

そんなに気まづくなるくらいなら怒るなよ…

そしたら僕がここまで悩むことなかったんだから…

とにかく今はテストだ…

主人公…お前の気持ちを教えておくれ…

「及川…。お前さっきの現国出来た？」

「出来なかった…」

「お？お前が珍しいじゃん」

「うるさいなあ…僕は元々現国苦手なの」

「そうなんだ！てつきりお前だから何でも出来ると思ってたわ。ま、次の数3で取り戻せば良いじゃん」

「教科違うから取り戻すも何もないだろ…」

キンコーン…

「あ、チャイムだ…じゃあな！」

今のはよく話しかけてくる奴。

名前？

えーっと…知らない。

何か学年5位以内には入ってるらしいけど興味がない。

僕より上に立つ奴しか名前覚える気は無いし。

ちなみに僕は入学時から学年トップを維持し続けている。

一度だけ2位になったかな…？

でも、あの時は熱が39度あったんだから仕方ない。

まあ良いや。

数学なら寝てても出来る。

それくらい得意だ。

って事で2つの案件について考えよう。

まずは雄司の事だな…

感謝がどうのこうのって言ってたよなあ。

僕だって感謝の気持ちくらい持つてるし伝えるさ。

ただ、最近は感謝するような機会が無かっただけで…

えっ…と去年から…？

いや…中学の時も言った覚えは無い…かな？

あ、小学校の時は先生に言ったような気がする！

でも、それが何だって言うんだ？

分からない…

感謝？

それがあのイベントと何関係するの？

あ、この計算違う。

こっちの公式使うんだ。

大体なんだよ、あのイベント！

何が面白そうなんだよ！

ただ皆で集まって遊ぶだけじゃないか！

それに何の面白味が有るんだよ！

あーもう！

分かんない！！

あ、これ…うん。

やっぱり。

「先生」

「どうしたー及川ー？」

「この問題なんですけど、この公式を使って解けて書いてますけど解けないですよ？」

「んー？俺の専門は歴史だから分かんない…担当の先生に聞いてこよう。ちよつと待っとけよー」

専門とか関係なく、あんた教師やってるなら高校出てるだろ。

これくらい分かれよ。

ザ…ザザ…カチャカチャ…「あ、あ。ううん。テスト、テスト。よし。えー3年生の皆さん、プリント2枚目の2の4問目ですが、先生が間違ってた書いてましたので、問題自体に×を書いて解かなくても良いことにします」

ほら、やっぱりだ。

…とりあえず雄司のは分からないから置いておこう。

あとはお父さんの「お前は俺と同じ道を辿って欲しくなかった」発言だなあ。

これも分からない…。

実際、医学部じゃないから同じ道ではないんだけどさ。

何かあったのかなあ？

まさか医局長クビ？！

いやいやそれは無いな…

何だかんだで凄い優秀な人らしいし、医療ミスなんかの話も聞かないから。

じゃあ何なんだよ…

キーンコーンカーン…

「はい、じゃあ後ろから回収してきてー」

「あー！もう！わっかんない！」

烏合の衆は目を丸く皿のようにして驚いている。
そりゃそうか。

いくらなんでもタイミング良すぎたみたいだし…

祐希5

本当にこんな事なのか…？

全く分からない。

でも、とにかく陽也に機嫌直してもらわないと…

「なあ…陽也。今日の放課後空いてるか？」

「何か分かったの？」

「まあ…多分だけど」

「じゃあ空けとく」

「ありがとう」

何とかキツカケは掴めた…

あとは帰りに話すだけだ。

「辰巳ー！おーい！辰巳？」

「ん？ああ悪い。どした？」

「お前の兄ちゃん来てるよ？」

「え？…雄司！」

雄司は苦笑いを浮かべながら手招きしていた。

「どうしたのさ？急に俺のクラスなんか来て」

「いやあ…クリスマスパーティーのプレゼンしてたんだけど何か腹立って怒鳴ってきちゃった…」

「それと俺がどう関係あるの？」

「いや、それじゃ面白くないって言われたからさ、また祐希にも考えて貰おうと思って…」

「はあ？あれ以上を俺に絞り出させてか…。まあ考えてはみるけど雄司も自分で考えろよ？」

「分かってるって。じゃ、頼んだぞー」

「おう」

どうやら俺発案のクリパは却下されたようだ。

けど…あの温厚すぎる雄司を怒らせる相手ってどんな奴なんだ…？

「祐希…帰ろう」

「お、おう」

さて、決戦だ…

「で、分かったんだよね？」

「多分だけど…」

「とりあえず聞かせてよ」

「おう…」

うわぁ…空気重すぎるよ！

話しづらい！

陽也が何か怖いオーラ出してる…

「陽也はさ…多分俺のことを親友ってだけじゃなくてライバルだと思ってるんだと思うんだ…」

「…。」

相づちくらい打てよ！

めっちゃめっちゃ怖いから！

「だから本当は俺に俺の欠点を教えたくないんだって思った。ライバル視点でも親友視点でも…」

「……プクッ」

ん？

くしゃみでも我慢してたか？

「多分、親友視点で教えたくなかったのかなって。俺が怒ると思ったから…」

「プハッ！だめ！もう無理！おかしすぎる！アハハハハハ！」

「は？」

「そんな難しく考えなくて良いって！最後のだけで十分正解！なの…ライバルとか…アハハハ！」

「な…！は？意味わか…」

「だから最後のだけで十分正解なの！」

「俺が怒ると思ったから？」

「そう。なのに：ライバル：プクク：」

「え：何で俺が怒ると思ったからって：？」

「だからさあ：」

陽也は俺に自分の欠点を怒らないで受け止めて欲しかったらしい。怒られて嫌われるのが嫌だったってのもあるみたいだ。

せっかく頑張って言ったのに怒られたから、イラッと来たとも言っていた。

雄司が言うには「それが陽也なりの気遣い」なんだとか：

俺にはまだよく分からない。

まあ一応仲直りも出来たから良いか。

とりあえず俺は俺でやる事が出来た。

自分が続けられること探した。

陽也も協力してくれるようだし、ちょっと頑張ってみよう。

「ただいまあゝ：」

「なんだその気が抜けた声」

珍しく雄司が落ち込んで帰ってきた。

「祐希いゝ。兄ちゃんはどうすれば良いと思う？」

「何がだよ：」

「勉強教えてもらえないかも：」

「……………それだけ？」

「うん：」

「そんなもん怒った理由有るなら向こうが謝ってくるまで待てば良いだろ！自分が悪いなら雄司は謝ってるだろうし。理由を分からせてやれよ。そしたら先に進めるんじゃないかねえの？ってか何で俺と陽也の冷戦状態の時の陽也みたいになってんだテメエは！」

「兄ちゃんは陽也みたいに打たれ強く無いのです：。それに、そんな捲し立てられてもお兄ちゃんは反応できません：」

はあ：うぜえ：

「クリパ、グレードアップさせといたメモ置いとくぞ」

「分かったあゝ…」

とりあえず雄司は凹んだらウザいから放っておくことにしよう…
放っておいたら勝手に浮上してくるし。

華絵6

家に着いて、私は寝込んでいた。

いや、実際には寝込んだと言うよりベッドの中で丸まっていたと言った方が正しい。

寝れる気がしなかった。

何故このタイミングで思い出したのか原因すら分からずにすすり泣いていた。

「ちくしょう…嫌だ。嫌だよ…。助けて…。誰か…」
助けを求めても誰も助けてはくれない。

当時、唯一助けてくれた母は仕事に行ってて居ない。

「怖い…。怖い…。怖いよ…」

ブイーン…ブイーン…。

！！！！

ブイーン…ブイーン…。

誰…？

恐る恐る携帯のサブディスプレイを見ると、悠美からだった。

「も、もしもし…？」

「ハナ…？大丈夫…？」

「悠美…悠美…。怖いよ」

「え、大丈夫！？今すぐハナの家に行くから待ってて！」

ちくしょう…いつもは抜けてるくせに…。

こんな時だけ鋭いなんてカッコ良すぎるわよ…。

ピンポーン

「悠美？！悠美…」

「ハナ！大丈夫？何も無かった？誰かに何かされた？」

「ちがっ…怖か…た。あり…と」

私は安心したのか悠美が着いた途端に眠ってしまった。

どれくらい寝たかは分からないが、母と悠美の声で目が覚めた。

「あ…れ？悠美？」

「あ、ハナ！おはよう。おばさん起きましたよー！」

「本当？ちょっと待ってて。今行くわー」

母の声は台所から聞こえてきた。

どうやら洗い物をしてるようだ。

に、しても…この状態は何だ？

「気持ち良かった？私の膝枕」

どうやら寝てしまってから悠美はずっと膝枕をしてくれていたみたいだ。

「うん。ありがとう。…でも、あれ？何で私ソファで寝てたの？」

「佐々木君が玄関から運んでくれたんだよー。実は私がハナの家の近くで迷ったトコ拾ってくれたのも佐々木君なんだー！」

「修一が…？チツ…不覚」

「まずはお礼するべきだろ…にしてもカエちゃん軽いねー。ちゃんとご飯食べてる？」

「本当、修一君も悠美ちゃんもありがとうね」

「いえいえ」「いえいえ」

は？

何でこいつがここにいます？

そして家が隣なのにも関わらずうちのリビングで寛いでるのは何故？

「今日はおばさん特製のご馳走だから食べていって！」

「ちよっ…お母さ…！待っ…！」

体に力が入らなくて私はその場にへたりこんだ。

「ダメだよハナー。貧血も起こしてるんだから急に動いたら目眩するよー？」

「うん…そうね」

マズイ…母さんに料理を任せてはいけない…。

母さんの料理は人を気絶させるくらいの能力は持ち合わせてる。

クソヤロウが居た頃からずっと働いていたし、実はバリバリキャリアウーマンの母は料理が超絶下手だった。

私は台所に向かった。

悠美と修一は居間でテレビを見て寛いでいる。

「母さん。私作るよ」

「いいわよー。たまには私にも作らせて」

「いや、母さん料理出来ないじゃない」

「フツツ…母親をナメちゃいけないわよ。あんたより早く家出てるから知らないかも知れないけど。最近、毎日お弁当作って持ってるのよ」

「どうせ冷と…ん？」

冷蔵庫を開けてみると冷凍食品は一切入っていなかった。勿論ゴミ箱も見てみたが冷凍食品の残骸は一つもない。

「いっつも華絵にご飯作って貰ってるから、お母さんも頑張っちゃった」

「でも…」

「華絵は今日は休んでなさい。まだ顔色良くないわよ」

「じゃあ…どれくらい上達したか見せてね」

××××××××××××××××

「やっぱり家に居る時と学校に居る時のハナって違うね」

「うん。何か落ち着いてるって言うか…冷たい空気が流れてないよね」

××××××××××××××××

母は本当に料理の腕が上達していた。

悠美も修一も「美味しい」と言ってくれた。

「そう言えば、悠美も修一も時間大丈夫？」

「俺は隣だし母さん知ってるから大丈夫」

「私は家に電話して泊まるって言うてきたー。お婆さんの了承も得

たし」

「そっか…」

私は母と視線を合わせた。

「さて、悠美ちゃん、修一君。お話があります」

「はい？」 「はい？」

この二人はよくハモるなあ。

「華絵の事で…」

実は料理をしている間、母と話をした。

私が今回、何故こんな事になったのか、その理由を二人に教えようと。

つまり…私の過去を話す、と言うことだ。

今まで必要最小限、行く学校の校長や保険医、担任にしか話していなかった過去を。

勿論、私は話したくなかったが「二人とも心配してくれて看病までしてくれたのに理由を教えないのは失礼だし、この先もっと心配かける」と言われ了解した。

話すなら自分から話したかったが母は、私から話すことをひき止めた。

私も今回、こんな事になった直後だし自分から話すのは辛いから母に頼んだ。

話が進むにつれ、二人とも顔がひきつっていった。

話が終わった時には悠美はボロボロと涙を溢していた。

泣いてる悠美は何だか色っぽくて可愛く見えたが、そんな気分でも無かった。

修一は凹んでいた。

「俺…家隣なのに知らなかった」

「ハナ…かわ…：…かわいそう…」

やはり二人とも相当ショックだったんだろう。

口々に慰めてくれた。

話の流れで何故か「ハナを守る同盟」も結成されていた。

「華絵、そろそろ悠美ちゃんの布団運びましょ」

「はい」

「私も手伝いますー。私が寝る場所だし」

「そう？じゃ手伝ってもらおうかしら」

「じゃ、俺はそろそろ帰ります」

「あら、そうね。気を付けて帰ってね」

「おばさん…気を付けるも何も隣なんで…」

「そう言ええ、そうだったわね」

佐々木家と一番親交深いのあなたでしょう…

「あ、そうだ。修一」

「ん？何？」

「悠美がうちに來てること修二君には言っちゃダメよ。言ったらア
ンタ更に修二君に嫌われるから」

「俺の事、心配してくれんの？ありがと♪大丈夫、言わないから」

「なら良いけど…」

「じゃ、おやすみー♪」

「佐々木君ばいばい！」

母と布団を運びに行った悠美が叫んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1197i/>

浮遊する泡

2010年10月15日20時54分発行